

第七十回県短歌大会選考結果

特別選「雑詠」

三枝 昂之 氏 選

◎人 位

そうなのか すばやく視線逸らされて見知らぬ人になりてすれ違う

青 森 志村 佳

◎天 位

載っている写真はどれも寂しそう宮沢賢治の笑顔がみたい

青 森 佐藤 東

【評】宮沢賢治の写真を見て「どれも寂しそうだ」と目を留めたところに発見が

ある。さらに、「笑顔がみたい」と反応を加えたところに作者の工夫があり、発見をうまく生かしている。

◎秀 逸（5首）

三成の口髭ぴんと張りだして田んぼアートはいま見頃なり

弘 前 長利 冬道

たけてゆく秋のかがよふ日を浴びて大根吊す母の丸き背

青 森 安田 溪子

両腕にふんわり海を抱くかたちこの故郷に二人老いゆく

青 森 三嶋じゅん子

◎地 位

街灯の淡きひかりの輪の中に間断のなく雪降りつづく

黒 石 澁谷 善武

【評】やむことない雪の風景がよく見える。つまり作者が見た風景が、そのまま読者に届く。これが短歌では大切。雪国の暮らしぶりがおのずから想像される

という点でも完成度が高い。

長崎をいつか一緒に歩きましょう八月九日きよう孫生れぬ

十和田 芳賀裕美子

青 森 野村優美子

◎佳 作（20首）

年輪の渦に巻かれて眠りある祖父の木の椅子書齋の森に

八戸 木立 徹

目出度くも高齢者に加わりて保険料ふえシニアと呼ばれる

むつ 吉田 章子

爆心地横死と書かれし墓標ありあの日に続く青炎の空

大鰐 澤 久枝

真夜一時魚市場のシャッターを開くれば澱みし空気の動く

八戸 遠瀬 信子

ポケットに太宰忍ばせ奥津軽今別駅の風に降り立つ

弘前 岩間 甫

障子貼り終へたる部屋に赤とんぼ入りきてふたりの会話明るむ

青森 風張 景一

視野検査終えたる九月の高き空片目づつ閉じ行く雲を追う

青森 櫻庭喜久枝

ひらがなで駄々つ子諭す保育士が難なく泳ぐ幼児語の海

六戸 古舘 公子

光子氏も目見まみにをさめし啄木の歌碑は津軽の海鳴りをきく

弘前 山内 聖子

立葵行水ブリキの金魚などスイッチバックする幼日に

むつ 高橋 昭一

髪を染め覗く鏡にうつりしはデフォルメされたピカソの女

青森 太田恵美子

にこやかに墓石売りくるセールスに仏になる気はないと断る

むつ 高橋やす子

森ひとつ消え去り太陽光パネルの黒き隊列押し寄せてくる

十和田 中里茉莉子

雨宮雅子棟方志功世に無くて水の花なる沢瀉は咲く

青森 川浪 祐子

文庫本の表紙めくれば淋しげな寺山修司の瞳に出会う

青森 加藤 洋子

窓際に大きな熊のぬいぐるみ床屋の三代目はおしゃれな青年

つがる 兼平 一子

ゆれやまぬ心のさまか少年ひとり大空ゆらしぶらんこをこぐ

十和田 罇 陽子

不機嫌な顔しているよと声かける鏡に映る自分の顔に

十和田 田畑 律子

コンバインは地球に水脈を引くごとし 青天の霹靂 浪打ち刈らるる

弘前 齊藤 純子

十和田 馬場 有子

宿題 A 「坂」

◎佳 作 (25首)

一生ひとよとはかくも早きか七十路の坂はゆつくり歌を詠みたし

青 森 鹿内 伸也

代々の田圃二町歩売りました跡継ぎもなく老いの坂ゆく

五所川原 菊地 美絵

くだり坂ゆくときわずかの痛みありリハビリ続けるわれの双膝

十和田 佐々木愛子

登りゆく八十路半ばの坂道をウルマンの詩の照らしつづくる

十和田 罇 陽子

ゆつくりと杖つきのぼる坂道を先ゆく孫は幾度も振り向く

青 森 大里 啓子

坂道を速度おとししトラックは林檎の香りふはりこぼしぬ

黒 石 白戸 けい

車椅子速さおさえて坂下る授けられたる母との時間

十和田 福井 詳子

坂道に三度のエンスト四十にしてようやく得たる運転免許

青 森 津島 妙子

杖の母と共に登るはいつまでか墓への小さな坂を踏みしむ

青 森 志村 佳

山拓き林檎を植系し父祖の苦勞アップルロードの坂は険しき

弘 前 赤坂千賀子

齊藤 守氏 選

◎推 薦 (5首)

村落の外れに残る飢餓坂折ふし質素な供物も並らぶ

弘 前 須藤 直助

統合で百四十年の歩み終ゆ学び舎に佇つ われ八十路坂

つがる 松橋 孝徳

子を育て笑い泣きたる坂の町五戸はわれの宝の小箱

青 森 濫田 紀子

五十集いさば辞め夫を介護の道選びみえなき坂のスタートに立つ

八 戸 遠瀬 信子

勾配が八パーセントの坂下り君住む街に飛び込みて行く

弘 前 中村あやめ

県命に走って登りし仁王坂高校入試発表の朝

弘前 永井 怜

氣をくばり上る坂道無事越して下りに転ぶ八十の身は

青森 嶋村 静子

「火垂の墓」ラストまで観ず泣きしとふ野坂氏逝きぬ今を憂ひつつ

青森 千葉 禎子

一筋の農業に生きあゆむ坂かごいっばいに茄子の収穫

十和田 下川原ツル

下駄ならし坂道駆けて祭みる里は坂町息はずむ町

おいらせ 苫米地昭子

ねり歩くみこしの若衆坂道も物ともせずにかけ声高く

十和田 田畑 律子

気にもせず急なる坂の奥にある長屋を新居と決めた若き日

青森 三嶋じゅん子

駅へ続くだらだら坂に開店の花の明るしロマン美容室

おいらせ 大平みゆき

母に添い観音堂の坂みちをゆけば愛しも歩幅をあわす

青森 川浪 祐子

覚悟して乗り越えなければならぬ坂 医師の言葉を淡淡ときく

青森 ささきせいこ

見る者を釘付けにして箱根坂フルパワーかける若きら熱し

青森 蒔苗 慶治

肥かつぎ山畑までの登り坂父母の難儀に今の吾あり

青森 岩田鶴枝子

坂道に佇み望む日本海母なる海にミサイルいらぬ

深浦 佐藤 宏子

歌会終へてわが家への坂道登りくれば岩木の嶺にひかる夕雲

つがる 兼平 一子

ちちははの家があるゆる登りゆく坂の上なる夏空あをく

青森 兼平あゆみ

竹内友子氏 選

◎推 薦 (5首)

湖底にも坂あるらしき骨化せし大木あまた傾きて臥す

弘 前 藤田久美子

たたかひの記憶の坂をヤーヤドウのぼる火扇赫あかき翳

七 戸 大串 靖子

終焉の君の身丈の軽ろけさに坂を登れば蝸ひぐらしの鳴く

六ヶ所 三戸 源治

下駄ならし坂道駆けて祭みる里は坂町息はずむ町

おいらせ 苦米地昭子

勾配が八パーセントの坂下り君住む街に飛び込みて行く

弘 前 中村あやめ

◎佳 作 (25首)

風の町蟹田の山坂のぼりゆき太宰の碑に凭り荒るる海見る

青 森 山本 透青

長靴にしもやけの足押し込みて急ぐ坂道ふで箱踊る

大 鱈 澤 久枝

東慶寺文士画伯の奥つ城に参る坂みち咲く四季桜

弘 前 岩間 甫

頬赤く眼をかがやかせ櫛のりて遊びし雪の坂ありし道

中 泊 宮越恵美子

秋の陽に身の丈余りの影法師子らにまつはり坂道かける

青 森 宮崎 法子

松林の坂を抜ければ陸中の磯いぐり打つ波 白く白く散る

弘 前 千葉 睦

子への便り投函をへてとんぼ飛ぶ坂道こころ愉しく帰る

青 森 安田 溪子

新米を積みし軽トラエンジンの音高く午後の坂登りゆく

十和田 佐々木せつ子

つづら折の坂登り来る中学生背の日本海夏陽に青し

つがる 原田 良明

坂の上の沈へ丁花さく裏庭に香りゆれをり 母おはします

八 戸 山口すゞ代

生真面目に動く段坂われを乗せ家電売り場にすんと降ろす

青 森 佐藤 しげ

病院の坂くだるとき海が見ゆ町を縁ふちどるリボンのやうに

青 森 風張 景一

知っている名前がすぐに出なくなり凸凹な坂夫とくだりぬ

六 戸 安藤 トワ

杖の母と共に登るはいつまでか墓への小さな坂を踏みしむ

青 森 志村 佳

山拓き林檎を植系し父祖の苦勞アップルロードの坂は険しき

弘 前 赤坂千賀子

ケータイにバスの時刻を読みとらせ旅のはじまる坂の尾道

十和田 田村 郁子

坂のある風景描きたしと言ふ君と小さき漁村の路地のぼりゆく

青 森 竹洞 早苗

母に添い観音堂の坂みちをゆけば愛しも歩幅をあわす

青 森 川浪 祐子

城下町に城を目ざさん坂あまた新坂・辻坂・本町坂はた

弘 前 横山 祥子

覚悟して乗り越えなければならぬ坂 医師の言葉は淡淡ときく

青 森 ささきせいこ

坂道に佇み望む日本海母なる海にミサイルいらぬ

深 浦 佐藤 宏子

幾曲り箱根の坂をゆく電車時折あじさいの花に触れたり

十和田 野月 祝子

ちちははの家があるゆるゑ登りゆく坂の上なる夏空あをく

青 森 兼平あゆみ

すこしだけ身のきかぬ君に少しだけ手をさしのべてあゆむ坂道

黒 石 島田 興三

牧草の荷崩れなきかトラックに確かめゆつくり坂道くだる

十和田 小笠原としゑ

福士りか氏 選

◎推 薦 (5首)

秋の陽に身の丈余りの影法師子らにまつはり坂道かける

青 森 宮崎 法子

新米を積みし軽トラエンジンの音高く午後の坂登りゆく

十和田 佐々木せつ子

常源寺坂自転車を押して二十年ひと日ひと日を働きて来し

弘 前 須藤まさえ

銀輪をくねらせ坂を走り過ぐ少年は早瀬くだる魚なり

八 戸 杉山 靖子

息切れがするとふ母の息さへもなつかしみ登る長谷寺の坂

青 森 白戸 邦子

◎佳 作 (25首)

郊外のコンビニぽつりと灯をともし紀伊國坂のむじなのやうに

八 戸 木立 徹

代々の田圃二町歩売りました跡継ぎもなく老いの坂ゆく

五所川原 菊地 美絵

飛行機の飛び立つ間ぎは急坂を一気に翔て天空の道へ

つがる 木村 茂子

坂道を杖つきたどる白髪はかつての上司そつと目を逸らす

青 森 齊藤 守

宿題 A 「坂」

登りゆく八十路半ばの坂道をウルマンの詩の照らしつづくる

十和田 罇 陽子

人生の坂降るころ この坂をふつと楽しまむその浮游感

弘 前 齊藤 純子

荷の絶ゆるなかりし母の背老いてなほ坂のごとく肉もりあがる

五所川原 松橋ミツエ

子を育て笑い泣きたる坂の町五戸はわれの宝の小箱

青 森 濫田 紀子

ゆつくりと杖つきのぼる坂道を先ゆく孫は幾度も振り向く

青 森 大里 啓子

少年はゆるい坂道のぼり来るボール蹴りつつメール打ちつつ

つがる 佐藤恵美子

くらやみにてのひらひらき太陽は地球の坂を昇りくるなり

十和田 星野 綾香

ななわたの坂道越ゆる老い二人つかず離れず頂に立つ

平 川 工藤 チエ

車椅子速さおさえて坂下る授けられたる母との時間

十和田 福井 詳子

山拓き林檎を植ゑし父祖の苦労アップルロードの坂は険しき

弘 前 赤坂千賀子

夕づきて尾花の白しアクセルを緩めてくだる坂道の辺に

十和田 大野あつ子

気にもせず急なる坂の奥にある長屋を新居と決めた若き日

青 森 三嶋じゅん子

覚悟して乗り越えなければならぬ坂 医師の言葉を淡淡ときく

青 森 ささきせいこ

駆けあがりまた駆けおりの夕陽坂 新人戦は次の日曜

八 戸 里見 佳保

幾曲り箱根の坂をゆく電車時折あじさいの花に触れたり

十和田 野月 祝子

氷坂右に左に登り詰めし親子車中に汗の握手す

青 森 宮川 雅子

車椅子押されて登る坂道に申し訳なく身の縮む吾

青 森 柿崎 エミ

すこしだけ身のきかぬ君に少しだけ手をさしのべてあゆむ坂道

黒 石 島田 興三

人生は坂道だらけ転ばぬようゆつくり歩めと母は教えき

十和田 関川八重子

ねり歩くみこしの若衆坂道も物ともせずにかけ声高く

十和田 田畑 律子

おばちゃんと兎らに呼ばれて四十年変わらぬ店あり坂を下れば

十和田 芳賀裕美子

宿題B「指」

◎佳 作 (25首)

熱愛の指切りをした日も杳く今は穏しく共に八十路を

野辺地 作田 サキ

車椅子のレースに挑む日本選手五指を突き上げゴール切りたり

青森 鹿内 伸也

育てたる蚕に成りし繭の糸指に吸いつく絹の感触

十和田 佐々木せつ子

電話線人差し指に絡ませて長話する夢見る娘

青森 澁田 紀子

緊張のゆるみて脳は忘れしか「食欲セーブ」の指令とぎれる

八戸 山口すゞ代

焼け落ちし蕪島神社の天井に子らが指にて描きし海猫鳴け

八戸 遠瀬 信子

あおぞらにひろがる黄のいろ描きつつ指にて蒔きゆく菜の花の種

十和田 星野 綾香

書き終へし君へのメールあたたむる言葉のひとつを指に残して

つがる 川嶋 雅子

しじみ採り全神経を指先に集めてさぐる春の湖底を

三沢 荒岡 恵子

指先を軽く頬にふれ思索する弥勒菩薩に時は溜まりぬ

黒石 澁谷 善武

齊藤純子氏 選

◎推 薦 (5首)

まだ熱き季節の縫ひ目に手をあててときめきを聴く指のあはひに

八戸 木立 徹

肩袖を決まつてあげるイチローの指の先までルーティンがある

弘前 藤田久美子

薪割機のような刃先に樹液しみ松の足掻きを指に受けとめる

弘前 千葉 睦

七つ星指にかぞふる祖父のこゑ聴こへてますか天の戦友びと

七戸 大串 靖子

銃握る覚悟の十指日焼けせり海外派遣のお前死ぬなよ

青森 風張 景一

宿題B「指」

母の指す空には雲の白かりき少女は近視を試されてゐた

青森 山本 英子

ゴッホの描く糸杉はみな天を指し炎のごとき力を吐けり

十和田 大井有希子

妻の指を離れし指輪三十年を子の臍の緒とともに在りぬ

青森 森 純一

夜桜に佇むふたりうしろ手の指絡らませて愛はどこまで

青森 田中百合子

糸を操る祖母の指先手品師の糸吐くごとく総糸にぶし

三沢 村岡 幸子

しなやかに時にはげしく主張する手話の指先ことだまとなる

三沢 竹内 友子

真白なる手袋はめてガイドする親指倒し人数へる術

おいらせ 武田 裕子

夏の夜の星座横切る流星群指折り数へる消えゆくものを

青森 蒔苗 慶治

約束のあの日のままで待つ小指なだめてそつと伸ばすいとしさ

青森 千葉かほる

逆転の優勝に子ら飛びはねて伸ばした指に赤トンボ来い

青森 佐藤 東

七十歳の頭と指はうらはらに削除のキーを押してしまえり

青森 蛭名 洋子

撃鉄に指掛けしまま眠りおり南スーダンの少年兵は

青森 木村 美映

その指もて鶴を折りゆくオバマ氏は四羽の鶴に平和を託せり

むつ 中村 笄子

ガスづまりか膨らむ牛の胃のまわり指にはじけばポンポン音する

十和田 小笠原としゑ

若きより裁ち縫ふ日日の長ければ指貫に曲がりし右手中指

弘前 中村 キネ

木立 徹氏 選

◎推 薦 (5首)

あおぞらにひろがる黄のいろ描きつつ指にて蒔きゆく菜の花の種

十和田 星野 綾香

サンダルにペディキュアの指のぞかせて自転車漕ぐ初夏の日盛り

青 森 志村 佳

思い出をひとつ語れば一段を編みおえている母の指先

八 戸 里見 佳保

撃鉄ひきがねに指掛けしまま眠りおり南スーダンの少年兵は

青 森 木村 美映

幼子の指跡のこる小さき土器是川遺跡に展示されおり

十和田 音道美保子

節太きわれの十指にふれながら私の中の母をみつむる

十和田 佐々木愛子

いくたびも指切りかはして別れたる幼をしきりおもふ秋の夜

青 森 安田 溪子

育てたる蚕に成りし繭の糸指に吸いつく絹の感触

十和田 佐々木せつ子

指を咬み独り待つ児はわれを見て泣いて駆け寄る夜の託児所

青 森 齊藤 守

書き終へし君へのメールあたたむる言葉のひとつを指に残して

つがる 川嶋 雅子

節くれし十指ほどよき熊手にて掃き残したる屑葉かき寄す

青 森 佐藤 しげ

しじみ採り全神経を指先に集めてさぐる春の湖底を

三 沢 荒岡 恵子

使いなれしゴム手袋は草をひく指の形にゆれて干さるる

十和田 福井 詳子

ゴッホの描く糸杉はみな天を指し炎のごとき力を吐けり

十和田 大井有希子

初めてのマニキュアつけてうれしげに九十五歳の母の旅立ち

六 戸 安藤 トワ

糸を操る祖母の指先手品師の糸吐くごとくかせ総糸かせにぶし

三 沢 村岡 幸子

◎佳 作 (25首)

指差され悪口言われたころよりもLINE拡散暗くて深い

青 森 高橋 圭子

野に遊び白詰草の髪飾り作りし白き指の日もあり

大 鱈 澤 久枝

肩袖を決まつてあげるイチローの指の先までルーティンがある

弘 前 藤田久美子

指先まで神経を集中させるらし児はトシューズに爪立てて舞ふ

十和田 小山田信子

しなやかに時にはげしく主張する手話の指先ことだまとなる

三 沢 竹内 友子

指先で孫らはさつと電子辞書八十路の指は古き辞書繰る

おいらせ 苦米地昭子

握りいし指のほどけて栗の実のころんとまろび幼子眠りぬ

八 戸 杉山 靖子

夏の夜の星座横切る流星群指折り数へる消えゆくものを

青 森 蒔苗 慶治

約束のあの日のままで待つ小指なだめてそつと伸ばすいとしさ

青 森 千葉かほる

リスト弾くルゲの頬骨その張りに強く長くや指のあるらむ

おいらせ 佐々木とも子

書きし夜のあなたの指を思ひみる便箋五枚を走るペン文字

青 森 兼平あゆみ

広隆寺宝冠弥勒の薬指に領ぜられたり十七の春

中 泊 中村 範彦

しろじろと思ひ出あつめ秋の陽の節くれの指レース糸編む

おいらせ 大平みゆき

若きより裁ち縫ふ日日の長ければ指貫に曲がりし右手中指

弘 前 中村 キネ

木村美映氏 選

◎推 薦 (5首)

「ハンコ押した！」孫の小さな親指に親指あてた！ secret pr

o m i s e おいらせ 日野口和子

焼け落ちし蕪島神社の天井に子らが指にて描きし海猫鳴け

八 戸 遠瀬 信子

銃握る覚悟の十指日焼けせり海外派遣のお前死ぬなよ

青 森 風張 景一

ゴッホの描く糸杉はみな天を指し炎のごとき力を吐けり

十和田 大井有希子

吹き渡る風の指揮者は見えないが雑木林は秋を奏でる

む つ 高橋やす子

◎佳 作 (25首)

楽曲を復習えなくなった指は瘦せピアノ曲ばかり聞きたがる夏

青 森 今 貴子

施設より連れ来し母の笑みてをり人差し指に赤とんぼ止め

青 森 布施 協一

行合の空の青さに馴染まむと飛ぶ赤とんぼ この指とまれ

つがる 木村 茂子

肩袖を決まつてあげるイチローの指の先までルーティンがある

弘 前 藤田久美子

台布巾ききゅつと指にしぼり終へ灯を消し見つむる星はやさしも

弘前 斉藤 純子

暗がりの小屋の中ほどの小引き出しいつものスパナ指が捜せり

五所川原 野呂 富枝

緊張のゆるみて脳は忘れしか「食欲セーブ」の指令とぎれる

八戸 山口すゞ代

あおぞらにひろがる黄のいろ描きつつ指にて蒔きゆく菜の花の種

十和田 星野 綾香

指先を軽く頬にふれ思索する弥勒菩薩に時は溜まりぬ

黒石 澁谷 善武

おさな時 水ぞくかんの「クラゲ」見て「指」のオバケと泣きながらにげ

青森 工藤 ちよ

がんの告知受けたる夜の茶碗洗ふ指より雫したたりやまぬ

六戸 古舘 公子

愛用のコーヒーカップは指を抜け夜の厨にかけらを拾ふ

青森 津島 妙子

サンダルにペディキュアの指のぞかせて自転車漕ぐ初夏の日盛り

青森 志村 佳

ベッドより失語の父の白きゆび時計を指して吾を案じき

青森 竹洞 早苗

生きる価値 日がな紙もてひらひらと障害に生る子の指問へり

中泊 檜山 英子

握りいし指のほどけて栗の実のころんとまろび幼子眠りぬ

八戸 杉山 靖子

リスト弾くルゲの頬骨その張りに強く長くや指のあるらむ

おいらせ 佐々木とも子

七十歳の頭と指はうらはらに削除のキーを押してしまえり

青森 蛭名 洋子

書きし夜のあなたの指を思ひみる便箋五枚を走るペン文字

青森 兼平あゆみ

兄の指動きなつかし夏の日にアルハンブラの思い出を聴く

弘前 和賀久美子

微かなる記憶手繰りてあやとりの指は天へと梯子を架けぬ

青森 成田 明美

どうしても他人に言えないこと幾つ厳選しても指がたりない

黒石 島田 興三

とりたてて目指すことなく過ごしおり必死な雲のほどけつつ茜

青森 野村優美子

ガスづまりか膨らむ牛の胃のまわり指にはじけばポンポン音する

十和田 小笠原としゑ

猫の指に胡瓜を押えぎこちなく五歳が切りしふぞろいを食む

十和田 芳賀裕美子

席題「灯」

◎秀 逸（5首）

荒るる海のやうに胸内波立てば常夜灯なる君を思ひぬ

弘前 中村あやめ

テーブルにろうそく置いてひとつ灯を二人見つめた震災の夜

青森 志村 佳

天空の星を仰ぎつゆうらりと灯る火やさし湯宿に憩う

おいらせ 苫米地昭子

まいまいを捕獲せんとて菜園の夜の見回り電灯二つ

三沢 荒岡 恵子

ランタンの灯りも消えて若きらは仮装のままに街へ散りゆく

青森 木村 美映

加藤捷三氏選

◎推 薦（3首）

・天位

口中に鬼灯入れて鳴らししは玩具とぼしき遊びのひとつ

青森 今井 邦子

・地位

深夜なほ空焦がしゐるわが村の基地の灯りを戦おののきてみる

つがる 中村 雅之

・人位

反戦の願いに明かり灯すごとボヴ・デイランの歌世界を包む

深浦 佐藤 宏子

◎佳 作（20首）

公園の「帰ろ帰ろ」のメロデーにひとりで帰る灯りなき道

鶴田 棟方 文雄

黒き布取り払はれて灯火管制解除となりし杳とほき日憶ふ

弘前 岩間 甫

山小屋に仲間と宿りし若き日の薪の灯火の妙に懐かし

青森 鹿内 伸也

凍てつきし星空おそるる杳き日の灯火管制の下なる母子

弘前 澤石扶実子

水陸の両用バス浮くダム湖には砂子瀬地区のたましひの灯

弘前 長利 冬道

まぎれなくわが血のふる里父母につながり霧をまとふ鬼灯

おいらせ 日野口和子

古きよきまちの匂いの消えゆきてコンビニの灯のひかりの洪水

十和田 中里茉莉子

やすらかな妻の寢息を確かめて消灯迫る病棟を出づ

平川 成田 光雄

旅立ちし妻の着物の長々と疲れて掛けあり灯火の部屋に

六ヶ所 三戸 源治

母の生きる灯しとならむ八粒の錠剤のみど過ぎゆくを見る

つがる 川嶋 雅子

老い澄むとふ言葉のひびきにほど遠く愚痴のひと日を悔ゆる灯を消す

青森 佐藤 しげ

門前の灯にゆらぐ白萩のひと枝を手折り母にたむける

平川 工藤 チエ

身障者の子がゐてわれの生があり灯を消せし子に従きて居間出づ

青森 風張 景一

孵卵器の卵灯に透かせば血の管の網目のごとし命始まる

十和田 福井 詳子

傾眠の母の枕辺淡き灯は見守ることく一夜を照らす

三沢 村岡 幸子

藁もやす灯り小さくなりゆきて今日の一日の喜び数ふ

五所川原 三上 久子

隠れ住む平家の落人洞窟にローソク祭りの悲しき歴史

藤崎 清水稼志男

書を捨てて街歩きたき秋の暮駅までの灯に誘はれて出づ

三沢 阿久津凍河

夢の中に明かりつけよと亡き母が言ふままわれはスタンド灯す

鯨ヶ沢 山下 正義

仏壇に灯をともしてる母の背はいつにもまして小さく哀し

弘前 和賀久美子

工藤せい子氏選

◎推 薦 (3首)

・天 位

子も孫も灯火管制など知らず夜長の卓の円居明るし

む つ 高橋やす子

・地 位

点灯夫の君が毎日ともしてゐるあかりは私の心を照らす

青 森 柴崎 宏子

・人 位

古きよきまちの匂いの消えゆきてコンビニの灯のひかりの洪水

十和田 中里茉莉子

◎秀 逸 (5首)

まいまいを捕獲せんとて菜園の夜の見回り電灯二つ

三 沢 荒岡 恵子

反戦の願いに明かり灯すごとボヴ・デイランの歌世界を包む

深 浦 佐藤 宏子

日が暮れてかぼちやの目鼻に灯がともる百鬼夜行のハロウィーンの街

八 戸 木立 徹

魂は灯となり今も「歌を愛せ」と信州の夏の葛原妙子

弘 前 藤田久美子

卓袱台にひとつガラスが灯を返す病ひ歎かず夫寝ねしあと

青 森 山本 英子

◎佳 作 (20首)

深夜なほ空焦がしゐるわが村の基地の灯りを戦おのきてみる

つがる 中村 雅之

夜の灯の賑はふ函館より帰り暗き青森なぜか安らぐ

青 森 山本 透青

黒き布取り払はれて灯火管制解除となりし杳とほき日憶ふ

弘 前 岩間 甫

ボブ・デイラン変らぬ灯抱きつつ世界に響け反戦の歌

青 森 櫻庭喜久枝

水陸の両用バス浮くダム湖には砂子瀬地区のたましひの灯

弘 前 長利 冬道

大津波より早五年鎮魂のライトしづかに人びとの振る

十和田 小山田信子

「点灯せよ」霧の山峡トンネルを四たび潜りて黄昏る家路みち

七 戸 大串 靖子

遺児われら護国神社の広庭に造りし雪の灯ろう明るし

五所川原 松橋ミツエ

らふそくの灯に頼る商のたちまち売切れ三・十一

五所川原 番場 輝子

今はもう形見となりし台湾蝶標本見つむ灯の下に

五所川原 野呂 富枝

参道に提灯ゆれて収穫祭鄙の神楽のお通り照らす

むつ 吉田 章子

三川 博氏 選

◎推 薦 (3首)

一門の葬りの先頭松明の灯りを掲げ吾は山門へ

八戸 遠瀬 信子

・天位
明日へとつなぐ灯し火たまたり診察室の声沁み透る

老い澄むとふ言葉のひびきにはど遠く愚痴のひと日を悔ゆる灯を消す

青森 佐藤 しげ

・地位

灯がともる小窓に弁当さし出して夜勤の父の顔だけを見し

弘前 山内 悦子

暮れ早き畑に火を焚きりんどもぐ何千の灯の揺るるがごと見ゆ

弘前 横山 祥子

夜の闇にベイブリッジの灯火は幾何学模様には浮かび上がれり

青森 森 純一

・人位
共働き灯り点らぬ息の家におかず一皿そつと置いて来ぬ

旅終えて家路を辿る飛行機の眼下の町の灯心やすらぐ

十和田 田村 郁子

◎秀 逸 (5首)

われ訪へば塞ぐ心に灯点るやホームの父の顔の和らぐ

むつ 矢越 朝子

灯がともる小窓に弁当さし出して夜勤の父の顔だけを見し

弘前 山内 悦子

目交の平館海峡を灯ゆく連絡船を見しも遙けき

青森 岩田鶴枝子

孵卵器の卵灯に透かせば血の管の網目のごとし命始まる

十和田 福井 祥子

小さき命晩婚の姪に授かると幸せ灯すメールが届く

野辺地 野坂 弘子

朝夕に灯す二本の蠟燭の燃えつきるさま確とみつめゐる

青森 千葉 禎子

母と見し父が暮らすという部屋の灯る明かりを今も忘れず

黒石 島田 興三

われ訪へば塞ぐ心に灯点るやホームの父の顔の和らぐ

むつ 矢越 朝子

夢の中に明かりつけよと亡き母が言ふままわれはスタンド灯す

鯨ヶ沢 山下 正義

席題「灯」

◎佳 作 (20首)

夜の灯の賑はふ函館より帰り暗き青森なぜか安らぐ

青森 山本 透青

まぎれなくわが血のふる里父母につながり霧をまとふ鬼灯

おいらせ 日野口和子

大津波より早五年鎮魂のライトしづかに人びとの振る

十和田 小山田信子

古きよきまちの匂いの消えゆきてコンビニの灯のひかりの洪水

十和田 中里茉莉子

朝なसानな熟れ初む庭柿見あぐる夫老いゆく日びの灯ならん

十和田 罇 陽子

サルビアが余熱を吐ける星月夜ゆるやかに恋ふ夕張市の灯

弘前 斉藤 純子

参道に提灯ゆれて収穫祭鄙の神樂のお通り照らす

むつ 吉田 章子

戦前より続けし店を閉じし今心の灯静かに揺るる

青森 相馬富美子

夕闇の祭り提灯照らされて舞う乙女子の額に光る汗

黒石 澁谷 善武

点灯夫の君が毎日ともしてゐるあかりは私の心を照らす

青森 柴崎 宏子

五十年苦樂を共にせし夫は我のこころの灯になる

六戸 安藤 トワ

傾眠の母の枕辺淡き灯は見守るごとく一夜を照らす

三沢 村岡 幸子

子も孫も灯火管制など知らず夜長の卓の円居明るし

むつ 高橋やす子

観音堂のまつすぐに立つ灯火を見尽していよう夫のかたわら

青森 川浪 祐子

歌会のほのかな灯火守りつつ四百回をめざす晩秋

むつ 立花 恵子

残すのはあと一日の神無月鬼灯ひと枝軒下に見ゆ

弘前 佐藤 千秋

憎しみて別れし人の魂を今宵は送らむ灯籠流しに

青森 木浪みつゑ

「歌詠むは生きる姿勢の問はるる」と亡き師の言葉 われの灯

つがる 佐藤めぐみ

薄暮のさびしき雲にほつほつと安らぎの灯よ街は明るむ

青森 嶋村 静子

山すその翁の家に灯りつく夕べの庭に確めており

十和田 馬場 有子

平井軍治氏選

◎推 薦 (3首)

・天位

深夜なほ空焦がしあるわが村の基地の灯りを戦^{おの}きてみる

つがる 中村 雅之

・地位

何もかも誤りだったと気づく日の驟雨の間を流^あれる尾灯

青 森 今 貴子

・人位

母の生きる灯しとならむ八粒の錠剤のみど過ぎゆくを見る

つがる 川嶋 雅子

◎秀 逸 (5首)

灯を消して会話の中の赤い実とその思い出に両手をかざす

八 戸 里見 佳保

五十年苦楽を共にせし夫は私のこのころの灯になる

六 戸 安藤 トワ

戦争に消えゆく子等の命の灯大海はみな涙のため池

おいらせ 齊藤 三千代

本音だし夫と諍いやがてくる灯火のような^{いたわ}労りのとき

青 森 澁田 紀子

反戦の願いに明かり灯すことボヴ・ディランの歌世界を包む

深 浦 佐藤 宏子

◎佳 作 (20首)

街灯の光の中に降る雪は花園に舞ふ蝶のごとしも

青 森 宮崎 法子

まぎれなくわが血のふる里父母につながり霧をまとふ鬼灯

おいらせ 日野口和子

古きよきまちの匂いの消えゆきてコンビニの灯のひかりの洪水

十和田 中里茉莉子

そり合はぬ家族なれども震災にローソクの灯に心繋ぎ留め

青 森 三浦美英子

秋深し渡りの白鳥舞い降りて刈田の賑わう灯の点ること

弘 前 傳法 けい

自らの弱さのくらがり灯^ほあかりの道を求めて歩む秋の日

十和田 星野 綾香

老い澄むとふ言葉のひびきにほど遠く愚痴のひと日を悔ゆる灯を消す

青 森 佐藤 しげ

まいまいを捕獲せんとして菜園の夜の見回り電灯二つ

三 沢 荒岡 恵子

病棟の案内灯に導かれ修業者のごと行き来する深夜^{よる}

む つ 高橋 昭一

孵卵器の卵灯に透かせば血の管の網目のごとし命始まる

十和田 福井 詳子

点灯夫の君が毎日ともしてるあかりは私の心を照らす

青 森 柴崎 宏子

台風の逸れし朝^{あした}の林檎園灯りのやうに垂るる実いとほし

弘 前 赤坂千賀子

終バスに乗りそこないて砂利道に灯る灯頼りひたすら歩く

十和田 佐藤 京子

庭手入れ今日は早めに切り上げてわがキッチンに灯をともしたり

十和田 大野あつ子

病床の夫を見舞ひてつく家路ぼつぼつ漏れくる灯^{あかり}やさしき

青 森 ささきせいこ

小さき命晩婚の姪に授かると幸せ灯すメールが届く

野辺地 野坂 弘子

憎しみて別れし人の魂を今宵は送らむ灯籠流しに

青 森 木浪みつゑ

「歌詠むは生きる姿勢の問はるる」と亡き師の言葉 われの灯

つがる 佐藤めぐみ

荒るる海のやうに胸内波立てば常夜灯なる君を思ひぬ

弘 前 中村あやめ

ごくろう様と声をかけやるこの海を休まず照らしし尻屋崎灯台

十和田 芳賀裕美子

